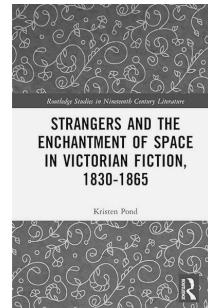


## 書評

Kristen Pond, *Strangers and the Enchantment of Space in Victorian Fiction, 1830–1865*  
(New York: Routledge, 2024)

新妻 昭彦（立教大学 名誉教授）



著者であるKristen Pondは、本書の自己紹介やこれまでの業績によると、現在、Baylor大学の准教授で、専門は小説を中心とした19世紀イギリス文学、特にヴィクトリア朝前期の小説と文化になるであろう。

本書は5章構成で、その第一章が“Introduction”になっており、本書の内容、方法、方向性を説明しているので、まずここから確認することにしよう。Pondはキー・タームを4つあげる。これはすでに本書のタイトルに示されている。すなわち、“stranger”と“enchantment”と“space”、そして“Victorian Fiction”にあたる“realism”である。残る“1830–1865”は、本書が主に対象にする期間であり、ヴィクトリア朝の立ち上がりから、1851年の万国博覧会を経て、中期にいたるあたりを示す。1830年と1865年に特別な意味はない。

まずstrangerであるが、これはPondも明言するとおり、「哲学的な他者」ではなく(6)、見知らぬ人、部外者、余所者の意味のstrangerである。すぐに分かることであるが、本書は微細晦渺を極める哲学的な思索とは無縁であり、文学研究上、これまで顧みられなかった様々なテキストを多く読み込むことを作業の中心にして成り立っている。そこでstrangerであるが、産業革命後のヴィクトリア朝社会となると、近代社会を構成する匿名性、非個人性を特徴とする、集団としての不特定多数のstrangerがまず考えられるが、本書が着目するのは、これとはまったく異なるものになる。単に未知の存在というだけであれば、「恐怖の犯罪者から温和な店主まで」(5)ありとあらゆる存在が考えられるが、本書が注目するのは、ごくごく普通で、日常に存在し、きわめて個性的で、しかも好感を得ることができる、

ひとりひとりの人物になる。こうしたごく普通の人物が状況によって未知な存在になり、匿名的で非個人的な近代社会の人間関係を打ち壊す契機として機能することになる。

次に *enchantment* であるが、これはさらに多様にして広範囲の意味を持ち得る。まず知られているのが、近代を示す“*disenchantment*”(脱魔術化)の反対語として、前近代を示す Max Weber の *enchantment* がある。Pond が依拠するのは Jane Bennett で、「偶然であれ、意図的であれ、『なにか予期せぬもの、十分には心構えができていないもの』(Bennett 5) に遭遇する際に取り得る心的状態」(Pond 7) としての *enchantment* である。すでに明らかなように、この「予期せぬもの」が *stranger* である場合が、本書における *enchantment* になる。

さらに Pond には、「ごく普通の *stranger* と日常において遭遇することが、周囲の世界の見方に対し、肯定的で、倫理的と言えるほどの影響力をどのように持ち得るかを考察したい」(8) という本書執筆の動機がある。ここで Pond は、Charles Taylor の“*a porous self*”(通気性のある／開かれた自己) と“*a buffered self*”(絶縁された／閉ざされた自己)を持ち出す。Taylor は、*enchantment/disenchantment* の前近代／近代の対比に対応させて、*porous/buffered selves* を規定している。したがって Pond では、*enchantment* な体験によって、閉ざされた自己が開かれた自己へと、肯定的かつ倫理的な変容を達成することになるが、これには半ば必然的に近代化に抗う意味が伴うことになる。書評においてほかの執筆者の論文を紹介するのは憚れるが、この変容を説明するには、Aubrey Plourde の *A Christmas Carol* 論を用いるのが分りやすい。これは学術誌掲載の 16 頁足らずの論文であるが、Bennett の *enchantment*、Taylor の *porous/buffered selves* など、重要なところで本書と一致しており、Pond 自身が要所要所(都合 10 か所)で自説を強化するために引用している。ここで変貌するのは Scrooge である。となれば、後は自ずと明らかであろう。Scrooge は、閉ざされた自己から開かれた自己へと、*enchantment* な体験を経て変貌する。この変貌後の Scrooge のように、周囲の人たちと開かれた関係を持つことを可能にする変化が、近代社会にあって、通常、匿名性の代名詞とされる *stranger* を契機として生じるとするところに、本書の独自性がある。

ちなみにPlourdeの論文は、同時にcritical/uncritical reading論でもあり、変貌前のScroogeにPaul Ricoeur流のsuspicious readingを行う研究者を割り振り、変貌後は自ら推奨するencharmed readingを行う研究者に見立てている。開かれた自己の研究者Scroogeには、亡靈が示す過去・現在・未来的なテクストの間に障壁がなく、開かれた倫理的な読みが可能になる。これに対してPondは、研究の枠組みには、距離を取っての懐疑的な読みと魅了された読みとのバランスが必要だとしている(215)。strangerには、安易に近づかない方がいい、危ない輩もいるからだそうだ。

ここまで説明できれば、残る2つのキー・タームの説明は比較的容易になる。“space”は、遭遇・体験する場所だけではなく、それ自体がenchantmentを引き起こすstranger的性格を保持し得る。具体的には、鉄道列車のコンパートメントや乗換駅(第二章)、都市の労働者階級の家屋(第三章)、郊外の新興住宅地(第四章)、カントリー・ハウス(第五章)になる。もう一つ挙げられているのが、1851年の万国博覧会における水晶宮ことクリスタル・パレスである。Pondは各国からのstrangerの間にenchantmentを生み出したこの巨大な建物を重要視しており、本書はその描写から始まるのであるが、以下の4つの章と規模的にも整合せず、本書では扱うstrangerをイギリス国内に限定したこともあり、あまり密接な関連は認められない。

以上の三者を描き出すのがヴィクトリア朝のリアリズムになる。Pondは、リアリズムはそれと相反する幻想的で、空想的なものをも含んで成立する、あるいは相反するものがあってこそ成立するとする、昨今のヴィクトリア朝リアリズム論に同調する。したがって、未知なる人物や非現実的な出来事と、歴史的社会的に正確な描写とが両立し、enchantment体験の契機を描き得ることになる。具体的には、第二章以下の論証部分で示される。

第二章は、“Riding with Strangers: Railway Encounters in Charles Dickens’s Fiction”で、空間としての鉄道とDickensの*Dombey and Son*(1848)と*Mugby Junction*(1866)が扱われる。本書第二章から第五章までの通例として、まずその章で扱われるテーマの背景が説明される。ここでは「鉄道」になる。次にそれとの関連で、当時のテクストの中にstrangerの表象を求めるべく、ガイドブックが紹介される。ガイドブックとは、そもそも読者にとって未

知なるものを取り上げて、導こうというものであるから、文字通りの、あるいは比喩としてのstrangerの表象を調べるには、実に好都合なテクストということになる。この章ではさらに新聞記事やPondが「鉄道冒険物語」(railway adventure story)と呼ぶ物語群もその対象とされ、strangerの表象が示される。残念ながら、この章に限らず、多種多様な成果はすべて割愛せざるを得ない。*Dombey and Son*では、Dickensの鉄道に対する相反する複雑な立場を確認するものの、Dickensは鉄道が社会を改良する可能性を信じていたと論じる。“The Signalman”を含む短編集*Mugby Junction*からは、歩けないが故に鉄道に夢を抱く少女Phoebe、さらにはPollyとの遭遇によって、閉ざされた主人公の心が開かれる、冒頭の2つの短編“Barbox Brothers”と“Barbox Brothers and Co.”が選ばれている。

第三章は、“Giving to Strangers: The Charitable Home Visit in Harriet Martineau’s and Charlotte Elizabeth Tonna’s Fiction”で、空間として都市労働者階級の家屋が取り上げられ、1834年の新救貧法以降の慈善活動の近代化(数量化・抽象化・非個人化)に抗う方法としての個別訪問(home visit)に着目し、労働者の家屋での中産・労働者階級間でのstrangerとの遭遇が求められる。救貧法をめぐる論評と戸別訪問用ガイドブックの検証。科学的無神論者と福音主義の伝道者という相反する立場のMartineauの*Poor Laws and Paupers Illustrated*(1833-4)とTonnaの*The Wrongs of Woman*(1843-4)が論じられる。

第四章は、“Living with Strangers: The Enchantment of Suburban Space in the Novels of Charlotte Riddell and Ellen Wood”で、拡大するロンドンが生み出す郊外の新興住宅地において、中産階級同志がstrangerとして遭遇することになる。ヴィクトリア朝前期から中期にかけて、郊外自体がstranger的だったとの説明の後、ガイドブックの検証。郊外の住宅地用のガイドブックがあったのは驚きだが、取り上げられる文学テクストは、ともに効外が重要な役割を果すRiddellの*City and Suburb*(1861)とWoodの*East Lynne*(1861)。strangerが、効外が持つ中産階級の理想を覆す働きをする。

第五章は、“Touring with Strangers: The Country House in the Novels of Mary Elizabeth Braddon and Charlotte Brontë”で、空間はカントリー・ハ

ウス、その内覧を核に発展するツーリズム、内覧の説明役を務めたメイド頭からガイドブックへの移行、貴族階級と中産階級との関係、新たな“touristic perspective”的成立などが背景の説明。*East Lynne* もそうだが、*Lady Audley's Secret* (1862)、さらには*Jane Eyre* (1847) ぐらいになると、そういう簡単には論じ切れなくなる。*Jane Eyre* では、Jane と Bertha Mason の関係を残すことになる。

本書は、全体に共通するテーマと方法に着目すれば、第一章の紹介に示されたとおりになるのだが、本領はむしろ第二章以降の主要テーマ（鉄道、新教貧法、郊外、カントリー・ハウス、ツーリズム）ごとの論考と、それぞれのガイドブックや新聞雑誌の種々多彩なテクストの検証にあるように思える。文学作品に関しても、センセーション・ノヴェルとして知られる*East Lynne* や *Lady Audley's Secret* は別にしても、論じられることが少ない Tonna や Riddell、さらに Martineau (その“impartial sympathy”) も、さながら作家論的な広がりがあり、貴重な研究成果になるであろう。以上の諸テーマやガイドブック、あるいはヴィクトリア朝前期の「近代化」に抗う肯定的で倫理的な人間関係に関心がある向きには、有益な研究書であると言えるだろう。

#### Works Cited

- Bennett, Jane. *The Enchantment of Modern Life: Attachments, Crossings, and Ethics*. Princeton University Press, 2016.
- Plourde, Aubrey. “‘Another man from what I was’: Enchanted Reading and Ethical Selfhood in *A Christmas Carol*.” *Victorian Review*, vol. 43, no. 2, fall 2017, pp. 271–86.
- Taylor, Charles. *A Secular Age*. Harvard University Press, 2007.